論文審査の結果の要旨

氏名：村　岡　宗一郎
博士の専攻分野の名称：博士（文学）
論文題名：A Synchronic and Diachronic Study on the Infinitival Selection in the Complement of the Causative and Perception Verbs of the English Language（英語における使役動詞と知覚動詞の補文における不定詞の選択制限に関する通時的・共時的研究）
審査委員：（主 査）日本大学教授　　保坂道雄
（副 査）日本大学教授　　吉良文孝　　日本大学教授　　塚本聡

本論文は、英語の使役・知覚動詞の補文における不定詞選択に関して、共時的及び通時的に研究したものである。具体的には、現代英語の言語事実（I made/saw her {wash/*to wash} the dishes.やShe was made/seen {*dance/to dance}.等）の背後にある統語的及び意味的制約について考察を行なった。また、古英語や中英語において現代英語に見られるような制約がまだ確立していないことを確認し、近代英語期に制約が生まれる点を、初期近代英語の言語コーパス（Early English Books Online等）や各時代の英訳聖書（West Saxon Gospels, Wyclif, King James Version等）を使って実証的に論じた。以下、各章の概要である。

第１章では、まず、現代英語の使役・知覚動詞の補文に出現する準動詞とそこに課せられる選択制限について説明を行ない、通時的にはこうした選択制限が常に存在していたわけではないことを概観する。さらに、使役動詞の補文と知覚動詞の補文における共通性に焦点をあて、両補文に出現する準動詞の分布、準動詞のアスペクト特性、補文主語の義務性、再帰代名詞（照応詞）の分布、及び補文内部要素の移動現象について比較対照し、使役動詞構文と知覚動詞構文の意味的・統語的共通性を明らかにし、両者が同等の統語構造を持つ可能性について論じた。

第２章では、まず、使役動詞の能動態補文における不定詞の選択について調査を行ない、共時的観点から原形不定詞と to 不定詞を補文に取る使役動詞と両不定詞の意味的繋がりを指摘した。使役動詞 make を例に挙げると、make が持つ強制使役の意味が原形不定詞の同時完結性及び結果性と整合し、補文に原形不定詞を取る構文が成立しているとする。さらに、使役動詞の意味的変化について通時的に分析を行い、使役動詞補文の不定詞の選択がいつ、どのようにして確立したのかを明らかにした。また、使役動詞の受動態補文における不定詞の選択についても共時的及び通時的に概観し、その選択要因には使役動詞の意味の確立が大きな影響を及ぼしている可能性について論じた。

第３章においては、知覚動詞の能動態補文における不定詞の選択について調査を行ない、共時的観点から原形不定詞と to 不定詞を補文に取る知覚動詞の意味的差異について概観した。具体的には、知覚動詞が持つ直接性（直接知覚）と原形不定詞が持つ強い直接証拠性が整合し、知覚動詞構文を成立させていると結論する。その上で、知覚動詞補文に出現する準動詞の意味の確立について通時的に分析し、知覚動詞補文の不定詞の選択がいつ、どのようにして確立したのかを明らかにした。また、知覚動詞の受動態補文における不定詞の選択についても共時的及び通時的に概観し、その選択要因には知覚動詞補文に出現する準動詞の意味（証拠性）の確立が大きな影響を及ぼしている可能性について論じた。

第４章では、これまでの議論を総括し、使役・知覚動詞の補文における不定詞の選択には、主節動詞の意味と補文の準動詞の意味が相互に関係していることを示した。また、通時的に補文における不定詞の使用が安定していなかった要因として、準動詞の意味的曖昧性がその原因である可能性について指摘し、後期近代英語以降、準動詞のアスペクト特性や証拠性モダリティが確立したために、現代英語に見られる態による不定詞の選択制限が生じたと結論づけた。

本論文の学術的意義は、まず、本論文が共時的及び通時的両面からの研究という点である。使役・知覚動詞構文の補文の特性については、共時的または通時的いずれかの研究だけでも、十分学位論文のテーマとなる内容である。しかしながら、本論文では、現代英語における同構文の意味特性をまず詳細に考察し、そ

の上で同構文の歴史的変化について更なる考察を行なっている。こうした研究方法はかなりの努力を要するものであり、実際参考にした文献も 400 点を越える。その結果、質・量ともに大変優れた論文となっている。次に、本研究が、理論的考察と実証的考察の双方を兼ね備えたものである点をあげることができる。現代英語の同構文の分析には、動詞の意味に関する理論的考察が不可欠で、特に近年の動詞のアスペクトやモダリティに関する研究を取り入れる必要があり、そうした点でも十分な考察が行なわれていることがうかがえる。また、近代英語の言語コーパスである EEBO 等を活用し実証的に論じている点は、理論的考察を裏打ちする手堅い研究方法として高く評価できるものである。なお、本博士論文の基礎となる研究発表及び雑誌論文は、各学会からも高い評価を得ており、令和４年度の日本英語学会優秀発表賞及び近代英語協会優秀学術奨励賞を受賞している。

よって本論文は，博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

令 和　５ 年　５ 月　１１ 日